

一義であることも、「淨法風者卽是惠明」(op. cit. 111 [607]) とあるによりても明かである。しかし惠明にしても淨風にしても、語義の上からは *nom quti t(ā)ngri* とは相應しかねるが、漢譯にはこゝにも引いた如く、淨風を一にまた淨法風とも記して居る。この「法」の字を入れたのは *rythme* の爲に外ならぬとシャヴンヌ、ペリオ兩氏は説明したが (op. cit. 60 [556] note 2)、如何であらうか。或は此の「法」字は *nom* と應ずる性質のものかと思ふ。

かゝる兩者對比の結果を一々こゝに挙げやうとするのではない。ただ此等の例によつて、兩者を對比すれば解釋の上に互に新に知り得る處多きことの一端を示さうとするに留る。

教律に關したこととして、第二十一文書中に摩尼の五戒を記した處があるが、文書破損の爲、詳しくは知り得ない。中に食物について、乾いた血を食ふ可らずとの規定もあり、また第二十二文書中には、罪障なき生きたる羔の肉は食ふべし、されど其の骨を破碎する勿れとの文句もある。

第三十一文書には佛教の阿難荅の法問が記されてある。即ち其の裏面には明かに阿難荅の名も見えて

1. geht nicht hinein, sagte er. Ananda, (anant)

2. der Mönch, wieder ehrerbietig also redend